

C-57 配色調和における嗜好色効果

大阪市大家政 ○花田嘉代子 山本直成

目的 配色調和の良否の評価に、嗜好色が影響を及ぼすか否かについて検討するために実験した。

方法 日本色彩社製の色彩研究用の色紙14色(赤系統3種、黄系統3種、緑系統3種、青系統3種、無彩色2種)を用いて嗜好色の判定を行ない、同時に、これら14色を2色ずつ組合わせた91個の2色配色について、配色調和の良さの評価を行なった。

被検者は、高校生(女子)32名、大学生(男子)21名、同(女子)21名、一般(男子)7名、一般(女子)8名、計89名である。

結果 1) 単独色の得点数と、配色に含まれた単独色の得点数との相関係数を求めると、全体的には61%の被検者において有意(危険率1%あるいは5%)の相関があり、相関係数の平均は、0.558であった。被検者グループ別には、高校生(女子)75%、大学生(男子)38%、大学生(女子)71%、一般(男子)43%、一般(女子)50%の被検者が有意の相関を示した。2) 2色配色調和の良さを、上、中、下の3グループに分けてみると、上位グループには嗜好順位第1~3位の色を含む配色の出現率は約74%で高く、下位グループには嗜好順位第12~14位の色を含む配色の出現率は約78%で高かった。中位グループでは嗜好順位第1~3位の色を含む配色の出現率は約43%、嗜好順位第12~14位の色を含む配色の出現率は約40%で、両者は略同様な値を示した。3) 上位グループの配色の平均明度差が最も大きく、中位グループ、下位グループと小さくなった。